

例解古五言辭典

編著 佐伯梅友 森野宗明 小松英雄

東京教育大学名誉教授
大東文化大学名誉教授
佐伯梅友

早稻田大学教授
桜井光昭

専修大学教授
鈴木丹士郎

学習院大学教授
土井洋一

青山学院女子短期大学
教授
森野宗明

筑波大学教授
小松英雄

箱・扉は醍醐寺藏舞楽図屏風より

装丁 川上成夫

各音の最初にあげた平仮名は、

『古今和歌集』高野切第一種による

古典へのいざなひ

——豊かな鑑賞は正確な解釈から——

古語辞典の理想像を目指して

この『例解古語辞典』は、これまでの古語辞典の殻を破って、まったく新たな構想のもとに編修されたものです。

引いて得られた知識が、古文の正確な解釈に直接に役立ち、それがそのまま古典の豊かな鑑賞力につちかうことができるような、そういう辞書を作りたい、また、入門期の人たちが、ことばの障壁を容易に乗り越えて、古典の世界にすなおに開眼できるための、ゆきとどいた手引きとなり、その奥に広がる世界にさらに深く分け入るための、安心して頼れる杖となり、さらにまた、いったん古典から離れた人たちが、その魅力にひかれて、ふたたびそこに立ちもどきたいという衝動をおぼえずにいらなくなるような、そういう辞書にしてみたい。これが編著者の一致した念願であり、出版社も、その趣旨に全面的に賛同して協力を約束してくれました。

そのような辞書は、どういう理念に貫かれ、どのような形式・内容をそなえたものとして編修されなければならないか。その方向を模索したあげく、現状においては確実によりよいものであり、おそらく、これこそが最善、かつ唯一の正統的なありかただと言つてよいのではないか、という結論として到達したのが、この『例解』という方式なのです。その特徴は外形のうえにも明瞭に出ていますか

古典へのいざない

ら、最初のページを開いただけでも、これが従来の古語辞典の類書の一つでないことは、一目でわかるはずですが、なぜそういう形式をとるようになったのかという理由、つまり、『例解』の趣旨とか、その背後にある基本理念などについては、それなりの説明が必要だと思われまふ。

わたくしたちは、この辞書を新しいねらいのもとに作り上げました。この形が新規だからといって、けっして新奇を追った結果こうなつたというわけではないのです。したがって、実際に利用するみなさんが、編著者の意のあるところをよく理解せずに引いたのでは、この辞書のねらいが死んでしまいます。そこで、古典を構成している古文とはどういう性質のものなのか、そして、その中に使われている、いわゆる古語とはどういう日本語なのか、ということについての概略的な説明を兼ねて、編修の趣旨を生かした、この辞書の使い方について述べておくことにします。

古語辞典という名称

耳馴れない名称を避けて、この新しい辞書も、やはり、古語辞典と呼ぶことにしましたが、ほんとうは、あまり望ましい名称ではないと思います。「古語」などという、もうそれだけで、心理的な壁が形成されがちで、われわれを不必要に身構えさせてしまうからです。古典が読めるようになるためには、めんどろなだけでおもしろくないといわれる古典文法を勉強しなければならず、しかも、その中に使われていることばの意味は、古語辞典でいちいち確かめなければならぬということ、なんとなく重荷を背負わされたような気分になってきます。そもそも、「古」という字がいけません。どんなに熟達してみたところで、そこで得られた知識が現実のうえで絶

対に役立たないということを、「古」という文字があらかじめ保証しているように見えるからです。

古語と現代語

江戸時代までの古いことばは古語辞典、それ以後の新しいことばは国語辞典、という地盤協定が、いつのまにかできあがってしまっているようです。そこには、死んだことばと生きたことばという認識も自然に働いているようにみえます。しかし、言語というものの本質的なありかたから考えて、これはちよつとおかしなことなのです。大昔から江戸時代末期まで、ほぼ同じような状態のままに推移してきた日本語が、そのあたりまでくるとにわかに大変貌をとげた、というようなことは、ありうるはずがないのです。

ことばの変化というのは、幼虫がサナギに、そして、サナギが蝶にというような、明確な節目を持つ変態——metamorphosis——として進行するわけではなく、たとえて言えば、ニジのように、一方の端からだんだん変わっていつ、途中で気がついたら、いつのまにかたいへん違った色合いになってしまっているといったものなのです。しかも、ニジの場合なら、似ても似つかない色になってしましますが、ことばの方は、さまざまな要因が複合して機能していますから、非常に変化しやすい面もあれば、なかなか変化にくい面もあります。「山」「川」「空」「星」「人」「目」「草」「木」などという語の意味は、過去において変化した形跡もなく、また、これから変化しそうな徴候もありません。「長し」「高し」「細し」「寒し」といったク活用形容詞の一群も、活用語尾の一部を変えただけで、基本的な意味に変わりはありません。そういうことばを数えあげていったら、きりがないことがわかるでしょう。どこの方言をとってみて

も、その点は同じことです。したがって、『万葉集』や『源氏物語』のころと現在とで、日本語がまったく違ってしまったと考えるのは、明らかに誤りであって、古語辞典の日本語と国語辞典の日本語とは、境目なしにそのまま連続していると考えてよいのです。南北両半球の間に赤道などという境界線が実際にあるわけではない、といったたとえが、この場合には適切でしょう。外来語などは別として、いまわれわれが使っていることばには、それぞれに歴史的な背景があるので、その点をしっかりおさえた古語辞典であるならば、過去のことばを現代の日常語との結び付きにおいて理解し、また、そういう日常的な日本語の奥行きを知ろうと、積極的に役立たないはずはないのです。

古代語辞典と古典語辞典

「古語辞典」という、同じ名称が付けられていても、どういう目的のもとにどのような範囲のことばを収録しているかによって、それらは、ほぼ二つの種類に分かれているようです。かりに名付ければ、一つは古代語辞典とでもいうべきもので、古い日本語の姿を示すために、仏典の訓読に用いられた語や古辞書の和訓などのようなものまでを収めており、語源解説にも特に力が入れています。もう一つは、古典語辞典と呼ぶにふさわしい、古文読解のためのもので、その収録語彙は、「古典」と呼ばれている文学作品に使用されている範囲にしばられます。ただし、実際にはそれら二つの線の間をいつているものが多いようです。古代語辞典と古典語辞典とは、目的も内容も、当然、違ってくるはずですが、この辞書は、典型的な古典語辞典として、その理想的なありかたを追求したものなのです。まず、この点を確認しておきましょう。

正確な古語辞典への近づき

辞書とは、引くものだというのが、当然のことながら、みなさんの立場ですが、これもまた当然のことながら、その前に、辞書というのは作られるものなのです。ことばについて議論になれば、辞書を引いて決着を付けようというほどに、辞書というものは全面的に信用されていますが、実のところ、それは専門家に対する買いかぶりなのです。国語辞典の場合でも、適切でない説明や、ときには、明らかに誤りがありますが、古語辞典となると、説明の基礎となる、古文の解釈が十分にできていないために、残念ながら、それがかなり極端なのです。わたくしたちの編修したこの辞書にだけは一つも間違いがありません、と保証したいところですが、さしひかえておいた方が良心的でしょう。ただ、この辞書では、語彙の量を、必要にして十分という範囲にしほり、それにややふくらみを持たせた程度におさえてありますから、すみずみにまでかなり目がとどいていくはずだ、ということだけは言えると考えています。

古語辞典の説明が、不正確だったり誤っていたりするのは、古文を正確に解釈していないところから起こっています。しかし、このあとに説明するところから明らかになるように、《例解》という方式をとると、すべての用例を納得のゆくまで吟味したうえでなければ、一つの項目も執筆することができません。編著者にとって、これはかなりきつい条件ですが、よい辞書を作るためには、やはりその手順を踏む必要があるということを、実行してみても、あらためて痛感しました。

用例は実在証明であってよいのか？

古典を読んでいて、その文章の中に、見馴れないことばや、わから

古典へのいざない

ないことばが出てきたとき、この辞書を引くことになります。しかし、その場合、最初の部分に並べられているいくつかの語義の中から、いちばんよく当てはまりそうなものを選んで、それでわかったことにしてしまったのでは、いけません。たしかに、そういうやり方でも、ひととおりの口語訳ぐらいいは、なんとかできるでしょうが、文章の内容まではとうてい理解できません。ことに和歌や俳句などは、一語一語の微妙な含みが全体の表現にかかわっていますから、そういう姿勢で読んだのでは、結局、何も読まなかったのと、さして変わりがないことになってしまふのです。

英和辞典の訳語を見て、それだけではわかりにくい場合、そこに添えられている用例を読んで、はじめて納得のゆくことが、しばしばあります。つまり、用例というのは、その語句の理解を助けるために添えられているのです。ところが、これまでの古語辞典は、それと同じように使うことができませんでした。用例そのものは、普通の英和辞典以上に丹念に添えられているのですが、読んでもわからないものが多く、その語の意味・用法を理解するうえで、ほとんど役に立ちません。これまでの古語辞典の用例というのは、それが幽霊語——ghost word——でないことの証明として、どの文献のどの部分に実際に使われているかを明示する、というところに主目的が置かれているために、たいてい、ごく短く切り取られていますから、それを読んでも、意味がとれないか、かえって誤解してしまふようなものになっているのです。

《例解》方式における用例の機能

古語辞典においても、やはり、英和辞典と同じように、用例というのは、その語の意味・用法を正しく理解するうえでの手助けとなる

ものでなければならぬはずで。また、その語の意味・用法は、用例から帰納されるのですから、そういうように解釈をした根拠を示すという意味においても、十分に意味の通じるものをあげておくことが必要です。「例解」という方式は、そういう、当然ともいふべき、辞書のあり方を実現しようとしたもののなのです。

一つの項目はどのように執筆されるか

新しい構想のもとに編修された、この辞書が、どのような具体的過程を経て作られたものであるかを、あらかじめ知っておくことは、この辞書の意図を十分に生かして使ってゆくうえで、大いに役立つはずですから、ここに一つの項目を取り上げて、それが仕上がるまでの工程を、これから詳しく説明してみよう。ひとつ、作業場を見学するつもりで、ついてきてください。どうせお目にかかるなら新しい機構で開発した作品、つまり、この「例解」という方式を採用することによって、これまでよりも進んだ解釈に到達することができた場合の一つを取り上げることにはしたいと思います。

解釈からの出発

この辞書の編修作業は、まず、文章を解釈することから始まります。ここにあるのは、『古今和歌集』の中でも、特によく知られている、次の和歌です。

花盛りに京を見やりて詠める

素性法師

見たせは柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける〔春上〕

辞書の世話になるまでもなく、そこに描かれているのがどんな光景であるかは、はっきりと目に浮かぶでしょう。その限りにおいて、これはたいへんやさしい和歌のように見えます。しかし、和歌としてほんとうに大切なのは、光景そのものよりも、その光景を作者が

どのようにとらえ、そして、それをどのように表現しているかというところにあるのです。その点に気をつけて、もう一度よく読みなおしてみよう。

「こきまぜず」という動詞——これまでの解釈

ここで気になるのは、「こきまぜて」という言い方です。どうも、これは、勅撰集の洗練された和歌の用語としてふさわしくない、俗語のような感じがします。そのあたりに何かがありそうです。そこで、この「こきまぜず」という動詞が、これまで、どのように解釈されてきたかを知るために、いくつかの古語辞典を調べてみると、次のようなことがわかります。

まず、ある辞書には、「こきまぜず」という項目が立てられています。これは、現代語の常識をはたらかせるだけで、その意味がわかるはずだということのようです。そのほかの多くは、「まぜる」「かきまぜる」「まぜ合わせる」といったたぐいの語釈を示しています。「まぜず」は「まぜる」ということでよさそうですから、知りたいのは「こき」の方です。しかし、それについては、たいいていの辞書が、接頭語としていながら、その「こき」を項目に立てていません。おそろはたして、どのように解釈されているのか、わかりません。おそろく、軽く意味を添えるというようなことなのでしょう。ある辞書では、「かきまぜず」の転、という語源説を紹介したうえで、「かき混ぜる」としています。

そういう中であって、「しごき落としたものを混ぜる」という、独立独歩の解釈を与えているものがあります。その辞書の編者は、「こきまぜず」の「こき」があいまいな接頭語などではなく、「しごき落とす」という意味の動詞「こく」の連用形として使われていると見

なしているわけです。古語辞典を二冊も三冊も引き比べてみるようなことは、普通、あまりしませんから、そういうことにほとんど気がつきませんが、実は、これほど有名な和歌に出てくる、こういうことばでさえも、辞書によって、まちまちの解釈が与えられているのだということに注意しなければなりません。この場合について言えば、もし一方が正しいのなら、他方は誤りでよし、ことによると、両方とも間違っているかもしれないのです。古語辞典に不正確な説明や誤った解釈がしばしばあると言ったことの意味が、これであろうやくおわかりでしょう。

散漫な解釈

みなさんは、『万葉集』でも『古今和歌集』でも、あるいは『平家物語』でも『徒然草』でも、ことばの面ではすべて完全に解釈ができており、問題なのは鑑賞のしかただけなのだと考えているかもしれないが、実際には、この和歌の場合でも、まだ十分な解釈ができていないからこそ、辞書の語釈にも右のような食い違いが出てきているのです。いくらなんでも教科書にとられている部分ぐらいは大丈夫だろうなどと、たかをくくったりしては、いけません。

どの辞書にしても、その語が、そこに示した意味になるということの根拠までは具体的に説明していませんから、引く側としては、自分の持っている辞書に記されていることを、いちおう、そのままに信じる以外にないという立場にあります。ほとんどの辞書には、「こきま・ず」の項に、この「見わたせば」の和歌が用例としてあげられています、その和歌がよく解釈できないからこそ、この項目を引いたのだという立場からすると、そういう示し方になっていたのでは、用例が添えられていないのと同じことです。しかたがない

古典へのいざない

ので、次のような口語訳で我慢しておくことになります。あるいは、それで安心してしまう人も、いないことはないでしょう。

ずっと見わたすと、緑の柳と咲いた桜とをかき混ぜて、都は、まさに春の盛りの、錦のような美しさだ。

つまり、これは、かつて小野老が奈良の都の春を賛美した、『万葉集』の次の和歌と、同工異曲ということになります。

あをによし(枕詞)奈良の都は、咲く花の薫ふがごとく

いま盛りなり

〔卷三・三六〕

しかし、この和歌を、右のように解釈してしまったのでは、実のところ、素性法師のせつかくの表現意図も、また、発想のしかたも、まったく理解できていないことになるのです。もちろん、そのおもしろさやすばらしさもわかるはずがありませんから、鑑賞などというてみたところで、見当はずれのものになってしまいます。『万葉集』の和歌を直球にたとえるなら、『古今和歌集』のそれは変化球だとみて、まず間違いはありません。発想とか修辞とか、どこかにひねりがあるのです。

助詞と助動詞

一貫した文章の形にまとめられていないことも、

見わたす 柳 桜 こきま 都 春 錦

という語群がこの順序で与えられたら、それらを結び付けて、右のような脈絡を作り上げることぐらい、子どもにでもできるはずです。ここに抽出された名詞や動詞は、いわば、場面提示のキーワード(keywords)とでもいえるべきものですから、さきに述べたように、実景はそれだけで十分に目に浮かぶのです。しかし、表現を支配するキーワードは、これらと別にあるのだということを知っておいて

ください。

大きな間違いのとは、「都ぞ」という部分を、(都は)という意味だとして理解してしまったところにあります。考えたうえでそのように解釈したのではなく、ただ読みすごしてしまったという方が当たっているでしょう。

一般に、係助詞の「ぞ」は、その上に位置している語句の意味を強める、というだけに理解されている傾向があるようです。「こそ」と比べて、強調の度合いはどちらが大きいか、というようなことだけを問題にしているように見受けられます。しかし、こういう種類のことばの機能を、そのように単純なものとしてはとらえないでください。係助詞「ぞ」の項を引いてみればわかるとおり、右の和歌の場合のような使い方は、現代語の「は」でなしに、「が」に相当しているのです。強調ということを含めれば、「都こそが」といったところでしょう。

もう一つ、しめくくりに使われている助動詞「けり」も、ここでは、「き」と対比される、回想の用法ではありません。このことについては、「けり」の項をよく読んでください。「けり」は単独でもそういう意味に使われますが、和歌の中で、このように「なりけり」という結び付きになっているものは、それまで気づかないでいたことに、あるいは、ぼんやりと見すごしてきたことに、はっと気づいたという驚きを、必ず表わしています。

それでは、素性法師がこの景色をまのあたりにして、都こそが春の錦だったのだなあと、あらためて驚いたというのは、いったい、どういふことなのでしょう。

『古今和歌集』に代表される、平安時代の和歌の世界で、自然の景色

をいろどる美しい錦といえ、それは秋の紅葉ということにきまっています。「うぐひす」が春の訪れを告げて梅の枝に鳴き、「ほととぎす」が夏の訪れを告げて「花橋」に宿るといふような、文学表現のうえでの約束事の一つとして、それは類型的に固定していたのです。したがって、「錦」という語は秋の和歌によく出てきます。

竜田川 紅葉乱れて流るめり 渡らば 錦 中や絶えなむ

〔古今和歌集・秋下〕

目を奪われるほどに美しい紅葉によって織り出された「錦」を、断ち切ってしまうのが惜しくて、川が渡れないというのです。

このように、秋に「錦」があるのなら、春にも「錦」はないものだろうか、と考えてみても、すぐには思い当たりません。桜の花はなるほど美しいにしても、それが錦に見立てられるためには、多彩ということが不可欠の条件なのです。文学的な設定としていえば、素性法師の頭の中に、「春の錦」はないものだろうか、あるとしたらそれは何なのだろうかという疑問が、わだかまっていたということになります。

花盛りの時分、ということとは、これから輝くような若葉の季節になろうという時分、かれは都のそばの山に出かけて行きました。周囲を山に囲まれた京都の地形を思い浮かべてみれば、特にどの山と言えなくとも、そこから見おろした都の光景は、だいたい想像がつくでしょう。これも、文学的な設定としては、「春の錦」を求めてその山に行ったと考えてよいかもしれません。遠くから一望に収めた都の景色は、芽をふいたばかりの柳の新緑と、桜の花の色とが、ちょうど、ちぎって並べたモザイク模様になっていて、まさに、錦にまがう豪華な美しさだったのです。もちろん、都中が柳と桜とだ

けでうずまっていたはずはありませんから、いろいろの樹木のそれぞれの緑が柳と桜を引き立てて、いっそう美しく見せていたということなのでしょう。そのまっただ中に住んでいて、かえって配色の妙に気づかないでいたけれども、この都こそが、いつも心にかけていた「春の錦」だったのだなあと、はじめてそれに気がついて、驚いたのです。

古典文法のめんどろな規則の一つとして、「なりけり」はある事柄にはじめて気づいた驚きを表わす、と暗記するのでは、やりきれないでしょうが、そういううしろ向きの姿勢をちよつと変えさえすれば、われわれは、ここに使われた「なりけり」の表面的な意味を理解するだけでなく、詠嘆をこめて表出された、新鮮な驚きを、作者とともに味わうことさえできるのだということがよくわかるでしょう。そして、そうなれば、一度とその規則を忘れることもないはずで、古典文法の規則というのは、言いかえるなら、その一つ一つが、こういう美しい世界の扉を開くための鍵なのです。

「こきまず」という動詞——その本来の意味

「こきまず」という動詞について、いろいろの古語辞典がどのような説明をしているかをさきに見てみましたが、どうもすっきりしません。ずっと大きな辞書ならと期待して引いても、やはり、「こき」は接頭語という程度以上のことは述べられていません。そこで、このことばの意味を、あらためて調べてみることにします。

『源氏物語』には、この「こきまず」が三か所に使われています。それらを、ここに書き出してみましょう。

九月晦日なれば、紅葉の色いろこきまず、霜枯れの草むらむらをかしろ見えわたるに、

〔関屋〕

古典へのいざない

御箱の蓋に、色いろの花・紅葉をこきまずて、こなたに奉らせ給へり。

〔少女〕

御方の若き人ども、われも劣らじと尽くしたる装束・かたち、花をこきまずたる錦に劣らず見えわたる。

〔胡蝶〕

特に目を引くのは、「少女」の巻の例です。紅葉の季節に咲いている花ですから、菊などが主になるのですが、さまざまの色の花とあざやかな紅葉とを「こきまず」て奉ったというのです。これが「こきまず」の本来の意味だと認めてよさそうです。

「こく」という動詞

今日、脱穀することを「稻扱き」といいます。稲の穂からもみを、まさに、しごき取るのです。しかし、もみならそれでわかりますが、花をしごき取るというのは、いかにも乱暴ですし、また、しごき取ったりしたのでは、せっかくの花の形がなくなってしまうでしょう。右の三例の場合、このことばは、しごき取るということでなしに、美しく咲いている花や、枝を飾っている紅葉を、散ってしまうまでに、鑑賞用にする目的で、手で取ること、つまり、摘み取ること、あるいは、つまみ取ることを意味していると考えられます。

『伊勢物語』に、次のような話があります。親しくしていた女性が、つまらない男の口車に乗せられてよその国に行き、そこで召使になつて、あるとき、たまたま、食事の世話をしに、以前の男の前に出てきた。その晩、男は女を呼び寄せ、

いにしへの匂ひはいづら 桜花 こけるからともなりにけるかな

〔六二段〕

と言ったのです。「いにしへ」は、大昔だけでなく、ごく近い過去をもさすことばですから、「いにしへの匂ひはいづら」というの

は、まえのあの美しさはどうなったの、ということですが、「こけるから」については、これまでのところ、なるほどと言えるだけの解釈がありません。第四句の意味は「未詳」であるといっている注釈書もあります。

「から」というのは、今では「亡骸」とか「抜けがら」とかいうようにしか使われなくなりましたが、平安時代には、たとえば、次の和歌のように、それだけで単独で用いられています（「から」の項を参照）。

恋しきに侘びて魂（か）感ひなば　むなしきからの名にや残らむ
〔古今和歌集・恋二〕

恋のわびしさに耐え切れず、魂が迷い出て、そのあとに残った抜け殻ということで、要するに、からっぽの「から」なのです。「こけるから」というのも、そういう「から」とみてよいでしょう。おまえはあれほど美しかったのに、ちょっと会わないでいるうちに、あんな男のために、きれいに咲いていた花をすっかり摘み取られてしまい、ただつまらなく生きていくだけだね、というのが、男の言いたかったことなのです。まだ、自然に花が散るような年齢ではない、ほんとうなら、今こそ女盛りなのに、という含みがこめられています。自分といっしょにあのまま暮らしていたらという皮肉なのでしょう。女は恥ずかしさに返事もできません。この和歌を思い切って現代風に意訳すれば、花を切り取られたあとに残ったチューリップの葉のようだね、とでもいうところでしょうか。

「こ・く」というのが、右のような意味であるとするならば、「こきま・ず」ということばは、そのようにして摘み取った花や葉などを、美しい配色になるように配置するということで、よくわかります。

日常語と古典用語

平安時代末期に編纂された『色葉字類抄』という字書などを見ると、クワの葉を「こ・く」というような使い方が示されていますから、この動詞の意味を、文学作品に使われているだけの狭いものとして理解してしまうのは、正しくありません。花や紅葉ならいいにしても、つまみ取っても、クワの葉なら、しこき取ったとみた方が自然です。そういう使い方が、今日の「稲こき」や、「こきおろす」に、そのまま通じているのでしょうか。その同じことばが文学作品の中に、「こきま・ず」という結び付きで使われると、こういう限定された意味になってしまうということなのです。

さて、ここまでわかってくると、「こきま・ず」のほかにも、「こきいる」「こきたる」「こきちら・す」など、「こき」という構成の動詞がいくつもありますから、それらの意味・用法についても、全部、洗いなおしてみなければならなくなってきました。この辞書の編修作業としては、もちろん、それらの語の意味・用法を再検討した結果、それぞれに新しい解釈を与えることができましたが、ここには説明を省略しますので、どういう結果になったかについては、それぞれの項目に目を通してください。要するに、ほぼ、右に立てた予測どおりだったということです。

連用形

「こきまぜて」を、現代語でかきまぜてなどと言いかえてしまうと、柳の葉と桜の花とをすり鉢にでも入れて、ガラガラとかき回すように、妙な感じになります。実際には、そのような、物を混ぜ合わせる動作でなしに、混ぜて配置されたその状態に、表現の中心がありますから、出てくる例も、あとに「て」や「たり」が付いたり、

連用形中止法だったりということで、連用形にかたよっています。また、本来は「少女」の巻のような、実物をさす使い方がそのものになっているのでしようが、やはり文学作品ですから、まるでこきまぜたように美しく、という比喩的な用法の方にかたよりを見せています。

「こきまぜ」という名局

「こきま・ず」という動詞に対応する名詞の形として、「こきまぜ」も使われています。まず、『源氏物語』の例をあげてみましょう。

霜枯れの前栽（植エコミ）、絵にかけるやうにおもしろくて、見も知らぬ四位・五位、こきまぜに、隙（ひま）なう出で入りつつ、げにをかしき所かなとおぼす。

〔若紫〕

「こきま・ず」の意味がはっきりしてきたので、これはとてもおもしろい使い方だということがわかります。といっても、多分、まだ、見当が付かないかもしれません――。

「はう（袍）」という項目を引いてみてください。「はう」とは、正装のときの上衣のことで、官位によって色が違います。そこにあげてある表で見ると、四位は深緋（しんぴ）で、五位は赤ということになっています。「こきまぜに」というのは、そういう美しい配色のことをいっているのです。まえにあげた「閑屋」の巻の場面と同じく、ここにも「霜枯れ」ということが使われています。五位の赤の袍は鮮やかな紅葉の輝きを思わせます。京のながめでは、柳と桜とのほかにも樹木があつて、それらの美しさを引き立てていたように、ここでも、四位・五位以外の人たちがちらほらと混じり、あるいは、そういう景色の背景になっていて、いっそうあたりのようすを美しく見せていたのではないでしようか。ほかの官位の人たちはどういう色の袍

古典へのいざない

を着ていたのか、もう一度、まえの表を見なおして、想像してみてください。晩秋の、いかにも平安朝らしい風景が、文字どおり「絵にかけるやうにおもしろく」、目に浮かんできます。

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際（やまぎは）少しあかりて、

紫だちたる雲の細くたなびきたる。〔枕草子・春はあけぼの〕

というような文章をもとに、清少納言は視覚型の女性だときめつけ、一方、『源氏物語』を「あはれ」の文学と規定したうえで、その作者、紫式部が情緒型の女性だといったりするのが、いかに安易な性格づけであるかは、こういう一連の例を見ただけでも、よくわかるでしよう。ついでに言い添えるなら、右の「若紫」の巻の例では、その部分の描写が、「いとをかしき所かな」ということばで結ばれていますが、本来なら、「あはれ」というところを、清少納言のお株を奪って「をかし」といつているわけではありません。視覚型と情緒型、あるいは、「をかし」の文学と「あはれ」の文学というように単純化して対比した方が、二人の才女の違いを、わかりやすく、しかもおもしろくとらえることができますが、こういう単純化は、そのわかりやすさ、おもしろさの分だけ真実から遠ざかることになりがちだということも、事実のようです。

配色の特徴

「こきま・ず」、ないし「こきまぜ」ということばが、いつから使われるようになったのかは、よくわかりません。『万葉集』や『古事記』『日本書紀』の歌謡などには出てきませんが、これは、たまたまそれらの文献に使われなかったというのではなく、当時はまだ、そういう言い方がなかったからだと思われます。きれいな花を頭にさして「かざし」にすることはあっても、花や紅葉を摘み取ってきれ

いに並べるといふ習慣は、まだなかったといふことでしょうか。
『延喜六年(926)右兵衛少尉貞文歌合』に見える次の和歌が、年代の明確なものとしては、われわれが見いだすことのできた、もっとも古い例でした。

紅の蓮浮かべる緑沼に 白波立てばこきまぜの花

まるで「こきまぜの花」のようだ、といふことです。ここでは、赤と緑と、そして白との配合になっています。

素性法師の「見わたせば」以下、いくつかの例を見てきましたが、「こきまぜ」「こきまぜ」といふ場合、いつでも、赤か、さもなくば赤系統のはなやかな色がいっているようです。はいっているといふより、むしろ、それが主役になっているといった感じがします。「こきまぜ」にして飾るといふ目的からいって、それが当然といふことでしょうか。

白露と秋の花とをこきまぜて 分くこと難き我が心かな

〔新勅撰和歌集・秋上・柿本人丸〕

この例などは、ちょっとこれまであげたものと見当が違ふようでもあります。よく考えてみると、結局は同じことになります。「秋の花」といふのは、野生のものをさすのでしうから、萩の花などを考えるのが普通で、それならやはり赤系統です。また、「白露」といふのは透明でしょうが、ことばとして白のイメージですから、やはり、この場合にも色の配合といふことでよいのです。ただし、「白露」が白のイメージだといふことは、この和歌が、実景描写としてでなく、観念的操作によって作られていることを意味しています。

『人丸集』の助詞「かな」

『新勅撰和歌集』では、この和歌の作者を「柿本人丸」としています。

「丸」を「まる」といふようになったのは室町時代以後のことですから、このように書いて「ひとまる」と読みます。つまり、「柿本人丸」のことなのです。人麿は『万葉集』の歌人の中でも初期に属しますから、これが証拠として使えるなら、「こきまぜ」はその時期までさかのぼれることになり、右の推定も訂正しなければなりません。しかし、この和歌には決定的にあやしいところがあるのです。それは、末尾が「かな」といふ助詞で結ばれていることです。奈良時代の和歌であれば、次のように「かも」でなければなりません。

天皇は神にし座せば 天雲の雷の上に座せるかも

〔万葉集・巻三・三・三・柿本人麿〕

『万葉集』の原文には、さまざまの表記の方式が入り混じっていて、どう読んでよいのかよくわからないものが少なくないのですが、この和歌の場合には「鴨」といふ字が当てられていますから、安心して「かも」と読むことができます。「かな」が使われるようになったのは平安時代の初期からで、それ以前、つまり奈良時代には、それと同じ意味で「かも」が使われていたのです。この交替については、「かな」の項の『万葉集』の欄に説明してありますから参照してください。さて、柿本人麿の和歌として、なぜ、こういうものが紛れこんでしまったのでしょうか。ついでに、そのいきさつも知っておいた方がよいでしょう。

平安時代の私家集の一つに『人丸集』というのがあります。私家集は、たいていそうだといふほどに、伝本にいくつかの系統があつて、それぞれに内容の出入りがありますが、この『人丸集』もやはり例外ではなく、そのうえ、どの伝本をとつても、平安時代になつてからのことばや、ことばづかいがかなり目につきます。平安

時代の人の判断で、いかにも人層にふさわしいというものをその家集の中に入れてしまったために、このようなことになったのです。

こういう文献は、よほど用心してかからなければなりません。どうやら、この和歌も、素性法師の「こきまぜて」の和歌に影響を受けて、そのあとに作られたもののように思われます。私家集とさえいえばすべて肩つばだというわけではないのですが、ことばの資料としては複雑な問題がありますし、専門家以外、普通にはあまり目に触れることもない作品なので、この辞書では原則として用例を採択する対象から省いてあります。といっても、その例が確實と判断され、しかも注目すべき用法なら臨機に採用するという柔軟性までを捨てることはしていません。項目を執筆する段階では、もちろん、それらも十分に考慮に入れていますが、用例の欄に正式に引用するものは、もつと信頼性が高く、そして、できるかぎり、利用するみなさんが実際に読む可能性のある作品の中から選ぶように心がけているということです。意味の下位区分をする場合にも、その語をよく理解するうえで、①②のあとにたとえ③を立てておく必要があるのに、その例が特殊な文献にしか見いだせないようなときには、語義だけを記して用例をあげないという方針をとっているのも、同じ理由からです。

項目としての取りまとめ

素性法師の「見わたせば」という和歌のほんとうの解釈が、これですらよく明確になってきました。研究の進歩、解釈の深まりには際限がありませんから、将来、どのような事実が明らかになるかまでは予測できませんが、いまは、このあたりで検討をうち切っておいてよいでしょう。

いろいろと大切なことがわかりました。「こきまぜ」「こきまぜ」ということばは、これまでの辞書の説明を全面的に改めなければなりません。「こく」という動詞の意味に取り違えがあったわけですから、「こき・いる」「こき・たる」「こき・ちらす」に直接の影響が及ぶのは当然です。

さて、ここまで来たところで、いよいよ、辞書の項目としての「こきまぜ」「こきまぜ」の取りまとめをどうするかというところに、はいります。ここまでは部品工場、そして、これから組立て工場です。せっかくよい部品をそろえてみても、ここで組み立ての手順を狂わせたり、手抜きをしたりしたのでは、よい辞書ができません。もちろん、熟練も不可欠の条件です。

主項目へのまとめ

「こきまぜ」は動詞であり、「こきまぜ」は名詞ですから、これらは二つの項目になるので、機械的に処理すれば、用例もそれぞれに振り分けられることになります。しかし、これら二つの語の場合、名詞とか動詞とかいう区別にとらわれず、いっしょに解説されていた方が便利です。しかも、ある程度・詳しい解説が必要でしょう。そういう詳しい解説のために、この辞書では、要説という欄が設けられています。それがどういう目的の欄であるかについては、あとであらためて説明します。

「こきまぜ」と「こきまぜ」との、どちらを主項目にしたらよいかということが、ここで一つの問題になるわけですが、その判断の基準は、どちらにした方が利用者にとって便利だろうかということです。この場合、どのみち二つの項目が並ぶことにはなりますが、それでも、直接に引いた項目にそのまま要説が付いていた方が便利で

す。ここで、二つの語の使われ方を比較してみると、十中八、九、あるいはそれ以上に、素性法師の「見たせば」の和歌を解釈するために引かれるだろうと、編著者は判断しますので、ここでは、「こきま、ず」の方が主項目として選ばれることになります。五十音順に並べると「こきまぜ」はそのすぐうしろに続きますから、そこに「前項の要説参照」と記しておきます。あちこちに、こういう処置がしてありますから、おぼえておいてください。

用例の選別

次の段階は、用例の欄に、右の中からどれを選ぶかという、ふるい分けです。項目によっては、引用できる例が一つしかない場合があります。文字どおりの孤例ということもありますし、いろいろの作品からいくつか拾い出すことができて、特殊な作品の中に使われているものや、信用のおけない伝本に見えるものは、原則として採用しないという方針をとっていますから、結局は、『更級日記』とか『平家物語』とかいう作品の用例が一つ残るだけということもあります。

こういう場合には、ふるい分けということが、事実上、問題になりませんが、難しいのは、いちおう引くことのできる用例が、いくつもあるときなのです。これまでの古語辞典の用例は、その語が過去において確實に使われていたことの証拠、すなわち実在証明という意味あいが強いです、あまり厳密な選択をする必要がありませんでした。なるべく古いところから選んでみたり、索引で調べたら、たまたま『大鏡』にあったというだけの理由でそれに決めたりというようなことが多かったのです。なかには、他の辞書が引いた用例を引かないという潔癖性を公言しているものもあります。いずれにし

ても、いちいち解釈しなくてもかまわないので、楽といえども楽ですが、そのかわり、やりがいいありません。あとでその部分をよく読んでみたら、別の解釈を施すべきところであったことに気がつくというようなことが起こるのも、もとをただと、そのやりのいなさからくる、おざなりの引用のしかたに原因があるのです。しかも、その方法なら、手づくりでなく、人海戦術による大量生産が可能だという点にも大きな問題があります。

ところが、この辞書のように、『例解』という方式をとることになると、まるで事情が変わってきます。いちいちの例を、文脈をおさえながら正しく解釈してみたうえで、それらの中から、もっとも適切と思われるものを、一つか二つ選ぶのです。どういものが適切かという基準は、あらかじめ決めておかなければなりません。

この辞書では、有名な作品の、その有名な部分に出てくる例を、原則として、優先的に採用することにしてあります。たとえば、「ものぐるほし」という形容詞なら『徒然草』の書き出しの部分とか、また、「あけぼの」という名詞なら、『枕草子』の「春はあけぼの」の一節とかいうことです。そうすることの理由については、あとで述べましょう。もちろん、そのような基準から用例を選んだ場合には、必要に応じて、ほかの用例を追加します。

第二の基準は、その語の意味が文脈からよく理解できる、わかりやすいものを、ということですが、これがなかなかたいへんなのです。引用する用例は、必要にして十分の長さに取り取るという条件のもとに選ばなければならず、しかも短ければ短いほど望ましいからなのです。散文中の用例の中には、数十行も引用しないかぎり、その語の意味がよく出てこないという場合が少なくありません。こういう

うものは辞書の用例として失格です。ときには、すぐそばにわかりにくい別のことが出てきて邪魔をしていることもあります。すてきだと思った景色なのに、ファインダーでのぞいて見たら、シャッター・ボタンを押す気がなくなつたという経験はありませんか。そういうことが、用例えらびにもしばしば起こるのです。

用例の切り取り

切り取り方が悪ければ、どんな用例でも死んでしまいます。その典型的な場合の一つをあげてみましょう。

これまでの古語辞典を見ると、「さみだれ」という項目には、次のように、思い思いの用例が引かれています。

さみだれのみじかき夜に〔枕・鳥は〕

さみだれはとがめなきものぞ〔枕・九九〕

さみだれに物思ひをれば〔古今・夏〕

申し合わせたように、同じぐらいの長さで切り取られています。が、読んでみると、はじめの二例などは、キツネにつままれたような感じがします。これでは、わかつたつもりでいたことばまで、わからなくなってしまう。實在証明主義の立場からするのなら、これでその役目を果たしていることになるのでしようが、辞書の用例が、はたしてこういうことでよいのでしょうか。

五月雨の短き夜に寝覚めをして、いかで人より先に聞かむと待たれて、夜深くうち出でたる声の、らうらうじう愛敬づき

たる、いみじう心あくがれ、せむかたなし。

明けやすい夏の夜の、その夜中に目をさまして、五月闇の中に鳴くはずのホトトギスの初声を、ひとより先に聞こうと、心をときめかしているのが、この第一の例です。

古典へのいざない

一日より、雨がちに曇りすぐす。つれづれなるを、「ほととぎすの声尋ねに行かばや」といふを、我も我もと出で立つ。(中略)北の陣より、「五月雨は、とがめなきものぞ」とて、さし寄せて、四人ばかり乗りて行く。〔枕・五月の御精進のほど〕

ふだんなら、警護の武士の詰所の外まで行つて、牛車に乗らなければならぬところを、五月雨の降っているときには、内裏の中の局まで牛車を入れてもかまわないことになっているというのが、第二例の「とがめなきものぞ」の意味なのです。なお、『枕草子』の本文には、もともと、段の区切れがなく、読む人の解釈によって区切りを付けているので、注釈書ごとに分け方が違っていますから、右のような〔枕・九九〕という示し方は、特定の本にしか通用しません。

さみだれに物思ひをれば、ほととぎす 夜深く鳴きていづち行くらむ

この第三例の和歌は第一例を思い起こさせます。寂しいひとり寝の物思ひであることも、下まで読めばすぐにわかります。

右のように、文脈にもどしてみればわかるとおり、これらの例は、どれもホトトギスとの結び付きで使われています。『古今和歌集』では三例が三例とも、また、『源氏物語』では、五例中の四例が、やはりそのようになっています。残る「深標」の巻の一例は、せめてクイナでも鳴かなければ、こんなあばら屋に光源氏をお迎えできなかつたといっている場面で、せめてクイナでも、ということの裏に、ホトトギスは無理だとしても、という含みを読み取るなら、これを例外と見なさないでよいことになります。梅雨がうとうとしさは、平安時代にも変わりなかつたでしょうが、そのうとうしさの中に、王朝貴族たちは、一方に、そういう楽しみを見いだしてい

たということなのです。この語が、ここに使用されているというだけではなく、このように使用されていることを示してこそ、はじめて用例と呼べるのです。その意味で言えば、右の三例は、いずれもよい部分を選びながら、切り取り方が悪いために、用例としての価値を完全に殺してしまっているのです。Brevity is the soul of wit. という格言が、つねに真であるとは限りません。しかしまた、大は小を兼ねるという原理もまた、当てはまりませんから、長めに切っておけば、それでよいというものでもないのです。

ことばとしての意味

「さみだれ」が今の梅雨をさすとか、ホトトギスが夏に来る渡り鳥だとかいうのは、よく知られていることでしよう。しかし、天然現象として、また生物として、それらは現在と同じであっても、ことばとしての意味までが同じではないのだ、ということこそ、そして、古典語辞典としての古語辞典というのは、そういうことを調べるためにこそあるのだ、ということを知っておいてください。「さみだれ」や「ほととぎす」の項で、この『例解古語辞典』がどのような用例を選び、それをどのように処理しているかについては、それぞれの項目を見てください。また、「うぐひす」「かり」「うめ」など、現在とことばとしての意味のずれているものがしばしばありますから注意してください。

ただし、そうかといって、神経過敏になる必要ありません。古典の文章を読んでいて、なんとなく変だなと思ったら、そのときに、めんどくさがらずに、知っているつもりのことばでも、念のために引いてみればよいのです。そのうちに、どういうところにポイントがあるのかわかってきますし、それにつれて、古文がだんだん身

近な存在になってくるでしょう。

「こきまず」の用例

ちよつとわき道にそれましたが、本題にもどします。当面の問題は、「こきまず」の項の用例としてどれを選び、それをどう処理しようかということでした。もちろん、編修する立場としては、選んでから処理するのではなく、どう処理するかを前提にして選ぶことになります。

まず、第一の原則に従って、素性法師の「見わたせば」の和歌が引用されることになります。しかし、これをただ用例の欄にボンと投げ出しておいただけでは、さきに述べたとおり、なんの役にも立ちません。そこで、十分に消化吸収が可能な形にするために、料理に取りかかります。

用例の書きかえ

はじめに、この和歌を、どのように表記したらよいかを考えます。あるいは、それが常識になっていないのかもしれないが、かな文学作品で、たとえ一行でも、原本がそのまま伝えられているというのは、一つもないのです。『古今和歌集』もその例外ではありません。現在、見ることでできるのは、平安時代末期以後に写されたもののばかりなのですが、もとの形で、この和歌が全部かな書きになっていたことは、確実に推定できます。それをわれわれが解釈して、漢字を当てるのです。解釈というのは、本文と別に、わざわざ説明を加えたものだけをさすのだと考えたら、それは正しくありません。教科書でも注釈書でも、あるいは参考書でも、その本文として示されているものが、すでに解釈の結果なのです。みなさんの目の前に出されるのは、たとえば、インスタント食品のようなもので、お湯

